

MA・SO・BO 通信

2026年7月に50周年を迎えるこぐま座を記念して
座談会を開催しました(2025年11月27日)。
その一部を紹介します。

談話

こぐま座と歩んだ50年

人形劇団ひよっこ 木田橋くに子

50年前のお正月、当時の札幌市長の板垣武四氏が札幌に人形劇場を作る、オープンは7月24日と新聞発表をしたことで、市役所は上へ下への大騒ぎ!! になりました。オープンが決まったんですが、誰が劇場の面倒を見るんだ? となって、市の職員で人形劇をやっている加藤博ともう一人指導員が必要という話から、たまたま加藤が主宰する「人形劇団ひよっこ」に入っていた私がこぐま座指導員をやることになり、6年間劇場の仕事にたずさわりました。こぐま座はいつも自分の中にありました。

職員は決まっても、最初は何も決まっています。オープンに向けて業者も徹夜の突貫工事でどんどん劇場が出来ていきます。そんな中で運営はどうするんだとか、入場料はどうするという話をしていました。

今はつながっているけど、当時、こぐま座と中島児童会館は分かれていて、ドア2つを加藤が棒でつなげたんです。事務室もないからこぐま座への電話も、児童会館事務室で児童会館職員が受けてくれました。楽屋もないので、児童会館の警備室を楽屋にしました。トイレも急ぎょ児童会館につくったのはいいですが、なんと幼児サイズ。児童会館が40年ほど前にリニューアルオープンするまでトイレは悩みましたね。中島児童会館がなかったらこぐま座は成り立ちませんでした。

加藤博が、札幌市と札幌市民と約束したのは、学校の長期休みと土日は欠かさず上演することでした。7月にオープンして、夏休みは学生劇団が上演してくれるけど、学校が始まるとできない。それで夏休みが終わったら誰がやるのかという問題が出てきました。その頃、社会人サークルはそんなに多くなくて、それで「ひよっこ」と寺尾さんの「ブランコ」と他にいくつかの劇団が頑張りました。それでも出し物がなくなったときは、寺尾さんや加藤がひとりで上演してくれました。「ひよっこ」は年間8作品ぐらい作ったこともありましたが、こぐま座への外部公演依頼もあったんです。それも「加藤、お前が自分の劇団を連れて行けば」ということになり「ひよっこ」で参加しました。民放テレビも3分位の作品を生で連続放映したいと来て、脚本音楽人形も毎回新作を出しました。今では考えられない話ですが、中島児童会館に寝泊まりしながら創作していました。

そういうことが2年ぐらい続き、その後はどうするんだっていうこ

とから「お母さんのための人形劇講座」が始まったんです。講座を始めることができたのは、中島児童会館にあったホールをつぶして工作室を作ったからです。6サークル60人くらいが同時に稽古して製作して右往左往できる工作室が出来て、そこでお母さん方が切磋琢磨しながら人形劇をつくりました。

中島児童会館があって劇場が存続していったというのは当時の児童会館館長の感想文にもある通りです。だから児童会館の行事にも協力しました。「お化け屋敷をやりたい」というときは、その頃は人形劇の学生も大勢いたので手伝ってもらいました。館長から「あなたは公演に行かないで、その人たち50人ぐらいの飯を作れ」と言われて作りました。1週間かけてみんなでつくったお化け屋敷は大盛況でした。中島公園のお祭りのお化け屋敷よりも怖いと評判でしたよ。ほかには中島公園の中を子どもたちが走るマラソン大会もやりました。5年間続いたんです。毎回参加賞として加藤博がこどもの名前を書いた賞状を、ひとりひとりに渡していました。1000人参加者がいたこともありました。そういうことにも人形劇の人たちは昼夜関わってきたんです。楽しい思い出です。児童会館の存在はとても大きかったです。

中島児童会館の工作室では、みんなで夜中まで製作していました。その頃の学生さんたちは空き缶でケコミをつくるなど、いろんなことを冒険したけど、こぐま座は止めないで応援するんですね。学生同士もすごく仲良かったですし、プロに転向していった人たちもたくさんいます。

公立で初めての人形劇場なので全国から注目も浴びて、いろんなプロの劇団がこぐま座で上演してくれました。道内のアマチュアの劇団もこぐま座の公演を目標にしてくれて、何劇団も上演してくれました。

お母さん劇団もできましたけどお盆とかお正月は難しい。じゃあこぐま座の座付き劇団を作ろうという動きもあったんです。結局無理ということでやめちゃったんですけど。札幌人形劇協議会がこぐま座の運営をやった時期もありました。でもそうすると、今まで自分たちが照明も音響も全部やって作品をつくることを大事にしてきましたが、職員が掃除以外はみんなやってくれるようになって、やってもらったら楽ですが、ちょっと違う局面に入ったようにも思います。

木田橋 くに子 (きだはし くにこ)

人形劇団ひよっこ代表 北海道人形劇協会事務局 札幌人形劇協議会事務局

札幌市社会教育課留守家庭指導員の時、中島児童会館館長の加藤博と出会い、人形劇団ひよっこの製作を手伝い、のち入団。昭和51年よりこぐま座指導員として6年間勤務。2001年加藤逝去のあとひよっこ代表として、他劇団の協力のもと人形劇活動を続けている。こぐま座50年の年、ひよっこは創立70年を迎える。



みんなで楽しめる場ってどんな場所？

【第4回】——いろいろな視点から考えてみよう！

第四回目は、仙台市にお住いの伊藤いづみさんにお話を伺います。

伊藤さんご一家は、仙台のさまざまな芸術活動やインクルーシブな場に家族で参加されています。昨年のピクニックシアターでは、仙台の人形劇チームとしてご一緒し、アートビレッジの皆さんとのパレードにも参加されました。

正木：ご家族で芸術や演劇の活動に参加するようになったきっかけを教えてください。

伊藤：きっかけは、長女の杏（あん）が生まれてからです。

杏が1歳半のときに「NPO法人アートワークショップすんぷちよ」※1主催の「オドリノタネ」という活動に家族で参加しました。

当時は、街の中で視線を感じたり、杏のことを自分の中で「完全に受け入れられている」と思えなかったりして…。

でもその活動で、杏の表現を見た人たちが「素敵だね」と言ってくれたんです。自分たち以外の人の目から杏を認めてもらえたことが、本当に嬉しかった。これまでマイナスにしか感じられなかったことが、初めて肯定された瞬間でした。私たち自身もすごく楽しくて、それまで“観る側”だった舞台に、出演することで心が解放されるような感覚がありました。

正木：これまでの活動の中で、特に印象に残っている出来事がありますか？

伊藤：ひとつに絞るのは難しいですね。どれも生活の一部のようなもので…。最近で印象に残っているのは、杏が「ソーシャルサーカス」※2に参加した時のことです。最初はアーティストの言葉がうまく理解できず、悔しくて泣くこともありましたが、ある日を境に吹っ切れたようで、それ以降は涙を見せなくなりました。毎日皿回しの練習を頑張る姿を見て、“できることだけをやればいい”と思っていた私の考えも変わりました。杏は杏なりに、「みんなと同じことをやりたい」と思っていたのだと気づかされました。

周りの子どもたちも、言葉が伝わりづらい場面では工夫しながら自然に関わり、助けすぎることもなく、お互いを尊重していました。学校では“支援する”“される”という関係になりがちですが、アートの世界では点数のような評価に縛られず、みんなが自由に感じながら自分の表現を出し、同じ目標に向かって取り組むことができたのだと思います。

正木：今後、誰もが芸術を楽しめる社会にしていくなために、どんなことが必要だと感じますか？

伊藤：障害のある子どもたちにも、同世代の子どもたちが経験するようなことを、もっとたくさん体験してほしいと思っています。学校や職場も、“障害のある人だけの場”ではなく、今ある場所に自然に関われるようになっていけたらいい。杏も“特別な存在”としてではなく、当たり前そこにいられる社会であってほしいです。杏が出演した舞台を観た障害のある方が、“観たよ、よかったよ”と声をかけてくださることがあります。言葉がうまく出ないために理解していないと思われがちですが、実際にはしっかり感じ取っている。そんなふうに、一緒に楽しみ、心を通わせられる関係が、これからもっと増えてほしいと思います。

※1 仙台市拠点のNPO法人。「すべての人にアートを」を理念に、障害・年齢・国籍を問わず、誰もが創作を楽しめる場をつくる団体。

※2 障害・年齢・国籍を問わず、誰もが楽しみ参加できるサーカス。今年9月には仙台でも「すんぷちよ」主催で実施された。

正木 千尋（まさき ちひろ）

人形劇団「デフ・パペットシアター・ひとみ」にて7年間、企画制作を担当。その後、仙台に拠点を移し、NPO法人エイブル・アート・ジャパン主催「広場の人形劇」など、障がいのある方々と舞台をつくる事業にコーディネーターとして携わる。現在は一般社団法人パップスの共同代表として、「ひとりに寄り添う人形劇（観客は一人）」の開発を行い、誰もが芸術を楽しめる場づくりを目指して活動している。



ほん MA・SO・BO シェルジュ HON-CIERGE

本のご案内人「本シェルジュ」
厳選本の紹介
岸さん編 ⑪

岸 春江（きし はるえ）

フリーアナウンサー・絵本ナビゲーター・絵本専門士・絵本セラピスト®／自宅に約3000冊の絵本を所有。主宰の「ファンタジアバル」は2019年、北海道読書推進運動協議会「優良読書グループ 奨励賞」受賞



「ゆきのこえ」

文 おーなり由子／絵 はたこうしろう／講談社

朝、カーテンを開けた瞬間、世界が白く染まっていたら——あなたはどんな声をあげますか？北海道で長年暮らしているわたしは、銀世界を喜ぶ前に、いよいよやってきた雪による『生活』への影響を考えてしまいます。それでも、毎年いくつかの瞬間に「ハッ」と息をのむような美しさに出会います。舞い降りる雪のふわりとしたゆらめき、新雪を踏むときのかすかな音、そして世界を包むような静けさ。絵本には、そんな五感で味わう自然の美しさがやさしく描かれ、雪の魅力をあらためて思い出させてくれます。雪の中で夢中に遊ぶ子どもたちにとっても、きっと心が共鳴する場面ばかり。読むたびに、子どものころの自分にそっと戻してくれる一冊です。



「あおいことり」

作 たてのひろし／絵 なかの真実／世界文化社

美しい小鳥の表紙に目を奪われますが、ページを開けば一瞬で物語の世界に引きこまれます。家をつくるために小枝を探し続ける小鳥は、にょいのかからない一匹の猫に出会います。この絵本は、2022年に刊行され数々の賞を受賞している『ねことことり』の対になる作品です。前作、精密画として話題になりましたが、今作はさらに時間をかけ、作者が「自分の筆跡が見えなくなるまで」小鳥を描き続けたそうです。その細やかな描写は、思わず頬を寄せて確かめたくなるほど繊細な質感です。けれど本当に心を動かすのは、その絵の奥にある“物語”。生きていくことの儚さと強さ、相手を思う優しさが、静かに胸の奥に灯ります。ページを閉じたあとも、ことりの小さな翼の音が心の中で響き続けます。



編集後記

毎年11月、札幌市内の劇場が連携して開催する「札幌劇場祭(TGR)」も2025年に20周年を迎えました。こぐま座とやまびこ座からは7つの演目で参加しました。「演劇の秋」を大勢の観客の皆様にご満喫していただけたかと思います。しかし春と秋が消え「二季化」が進むといわれる北海道、「芸術の秋」はどのように変わっていくのでしょうか？2026年はこぐま座50周年の年です。（戸塚）

お問い合わせ
お申し込み

札幌市中島児童会館 tel 011-511-3397
札幌市こどもの劇場こぐま座 tel 011-512-6886
〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番1号
(地下鉄南北線「中島公園駅」3番出口より徒歩1分)

MA・SO・BOに関する最新情報、
MA・SO・BO通信のバックナンバーは
ホームページからご覧いただけます。

